

小田原編年録

まみや・ことのぶ

作者:間宮士信(1777-1841)

成立:文化9年(1812)



解題

Keyword

- 小田原北条氏
- 「小田原日記」
- 「北条五代記」
- 「快元僧都記」

小田原北条氏に関する事蹟を編年体に著述した史書。先祖が北条氏遺臣であったことに因み、間宮士信(まみや・ことのぶ)が北条五代の盛衰を古文書や諸記録、軍記物などを基に編年体に詳述したもの。文化年間の成立か。系図、地誌、城郭、『小田原衆所領役帳』(#43)、古文書などを付して集大成している。

■ 成立経緯

本書の文化9年序によれば、士信遠祖の間宮信冬以降の四代までが北条氏に仕えた。四代目の間宮康俊は伊豆山中城で戦死、士信の間宮家の祖はこの康俊の甥にあたる正重で、徳川氏に召され幕臣となった。そのため士信は北条氏及び徳川氏に厚恩を感じて、小田原編年録を編纂することにしたという。

本書編纂の企図は凡例に記されている。小田原北条氏に関する史書は山角紀伊守定勝の『小田原日記』や三浦浄心の『北条五代記』(#11)が流布していたが、それぞれ欠点があり満足できず自ら編纂する気持ちに至り、ついに北条五代103年の盛衰を記すことになった。けれども戦国の世のこと、徴すべき文献は乏しく、その中でも前記二書は「見てしる人の手」になったものであるから、採るべきものは多い。これを基として文書、記録などから採摘したとする。

本書に記された目録は巻首2巻、本編11巻、付録5巻の計18巻であるが、現在伝わっている写本は、本編のうち既に6巻分が欠け、逆に目録にはない付録が4巻分付加され計16巻である。付録の8巻目は欠本とされるか

ら、完成された形としては付録が10巻となり、最大で23巻の構成が想定できる。

ここに成立に関して次のような推測がある。序の書かれた文化9年は士信36歳の年であり、同時に昌平坂学問所地誌調所の調方頭取を命じられた年である。『新編武蔵風土記稿』(#22)など地誌編纂を主宰し、公務に忙殺される日々が晩年まで続くことになる。本編の欠如は完成されていたものが失われたのではなく、没年まで未完成のままであったのではないか、という疑問である。

また、追加された付録は古文書や制度、軍法など本編を著述するための、いわば基礎となるべき部分である。書き進んでいくうち目録を書いた文化9年当時の構想が、予想外に膨らんでいった可能性も否定できない。

いずれにしても士信自筆の原本が見つからない現在では真偽は不明であり、欠損部分の発見が切に望まれている。

■ 作 者

間宮氏は信冬という人物の時をはじめ伊豆において北条早雲に従い、以後信盛、信元、康俊までの四代が、早雲から氏直まで北条五代当主に仕えた。康俊は天正18年(1590)伊豆山中城攻防戦で戦死、弟の綱信が家督を継ぐが間もなく小田原北条氏は滅亡する。綱信は徳川家康と面識があり聘されたが固辞し、子息の正重が出仕した。正重は武蔵橋樹郡などで300石を賜り幕臣となった。なお正重の子正秀は大坂夏の陣で討死、戦功が認められのち加増あり。都合800石を知行するに至ったという。士信の間宮家はこの正重を祖とし士信は十代目の当主である。

『寛政重修諸家譜』などによれば、間宮士信の諱をはじめ信民、總次郎、剛(号)次郎、のちに庄五郎と通称し、白水と号した。母は清水氏。父公信は御書院番。兄がひとりあったが早世。寛政10年(1798)2月父の死により5月家督相続、翌月徳川家斉に拝謁している。時に22歳。逆算すれば安永6年(1777)生まれとなる。采地800石、妻は木下萬之助利泰の女という。

文化7年(1810)に地誌調所出役、同9年同調方頭取、天保2年(1831)には西丸小姓組二番組より同三番組与頭に転じ、同11年二丸留守居に累進している。地誌調所へ出役後は没年にいたるまで30年間、昌平坂学問所内に出仕して地誌などの幾多の編纂事業を主宰した。士信は公務として文政5年(1822)完成の『編修地誌備用典籍解題』をはじめ『新編武蔵風土記稿』『新編相模国風土記稿』(#23)などの地誌編纂に携わる傍ら、本書のほか『小野路の記』や『相州国分寺鐘銘考』などの自著を残している。

天保12年(1841)間宮士信は65歳で没する。間宮家の墓所は歴代谷中の長明寺であったが、士信は生前に遺言して領地である下総千葉郡高津村の観音寺に埋葬するように指定していた。その理由は明らかでない。現在八千代市高津の同寺境内に「高津村領主間宮士信公顕彰之碑」がある。

内 容

現在目にするのできる本書の構成は別記のとおり(構成の項参照)である。編年体に記された本編に欠損の多いことが残念であるが、その他の特長が補って余りあるものとなっている。

本書の凡例7条で土信は「凡(およそ)古ヲ考ルハ文書ニシクハナシ」と明言する。歴史考証における古文書重視の姿勢は、この時代驚嘆すべきものとの指摘がある。付録に収録された古文書は221通に及び、ここにしか収められていない貴重な文書も存在するという。

また引用書目として挙げ、実際に史料として採用したものは『高野山高室院過去帳』『快元僧都記』(#10)など現在一級史料と認められているものが多く、土信の歴史実証の目の確かさが伝わってくる。

巻首に収録された北条氏系図や城誌の考証は詳細を極めており、特に城郭は現在では完全に失われているものも多く、地名、沿革、図面などは他では得られないものとなっている。土信の優れた調査力、考証力の高さが認められ、本書が小田原北条氏研究の原点として参照、引用されることの多い所以である。

諸 本

本書は間宮土信自筆の原本が未だ発見されていない。写本は内閣文庫と東京国立博物館に所蔵されるもの2種のみが知られ、内容は同様であるという。写本の僅少さゆえ比較考証も不可能となっている。内閣文庫本は楷書で読みやすいもので、影印本が出版されている。その奥書に、明治8年3月塚達氏の所蔵本を内務省図書部の課長岡本繁実が書写させたとある。その塚達氏の所蔵本も現在では所在が明らかではない。なお名著出版刊影印本の最終巻巻末には杉山博氏作成の詳細な「小田原北条氏略年表」を付す。



構 成

※【 】内は名著出版刊影印本の収録冊を示す

巻首上 序 目録 引用書目 凡例 北条系図 年表 北条家分国地誌(惣説 各国別)【第1冊】

巻首下 城郭(各国別)【第1冊】

巻1～2 早雲[欠]

巻3 氏綱(永正16-天文10年)【第2冊】

巻4 氏康(天文10-同23年)【第2冊】

巻5 氏康[欠]

巻6 氏政(永禄3-同7年)【第3冊】

巻7 氏政[欠]

巻8 氏直(天正元-同9年)【第3冊】

#13 小田原編年録

巻9 氏直[欠]

巻10 氏直[欠]

巻11 氏直(天正18年5月-文禄2年4月)【第3冊】

附録1～3 小田原分限帳1～3【第4冊】

附録4～6 古文書【第5冊】

附録7 制度 軍法 金銭 貢税夫役 関東総説 足利系図 上杉系図
【第5冊】

附録8 [欠]

附録9～10 城地並鎮営石炮堞古柵【第6冊】



史料本文を読む

<影印本>

- 『小田原編年録』全6冊 名著出版 1975 [K291/98/1～6]



史料についてさらに知る－参考文献－

<内容について>

- ◆下山治久「『小田原編年録』所収古文書について」(『歴史手帖』vol.3(1) 名著出版 1975 [Z210.05/17])
- ◆鈴木圭吾「間宮士信の新資料」(『歴史手帖』vol.4(8) 名著出版1976 [Z210.05/17])

<作者について>

- ◆*間宮富士雄「間宮士信とその家系」(『姓氏と家紋』(52) 近藤出版社 1988)
- ◆*窪田孟「文化・天保期の碩学 間宮士信」(『歴史研究』vol.43(4) 歴研 2001)
- 『江戸幕府編纂物』解説編・図版編 福井保著 雄松堂出版 1983 [027.1/1/1～2]